平成22年7月20日　　第１６号

市川を調べる

編集　市川を調べる会（会長・星　一郎/事務局・木村隆一）
発行　八戸市立 市川公民館（ 館 長　氣 田　武 男 ）

高屋敷の今昔②

高屋敷　　氣田　武男

〈 高 屋 敷 の 変 遷 〉

1. 一里塚と追分石

高屋敷は、八戸から田名部に至る「**北浜街道**」の中では、奥入瀬川を挟んで三戸郡と北郡を結ぶ交通の要衝として、古くから重要な位置を占めてきた。

下市川（浜市川）から高屋敷に至る街道の両側に「**一里塚**」が2基築かれていた。一反歩位の広さに土盛りした小山で、高森と呼ばれていた。現在は田んぼの中の道が90度にカーブするところで、遺構は昭和13.4年頃まで残っていた。

また、この街道が百石に右折する所（現・高屋敷交差点）には、**庚申塔**を兼ねた「**追分石**」（道標）が建てられていて、側面には「**右　百石　田名部 道**」と刻されている。この石は、国道45号線建設の際に小向藤市家入口付近に移設された。左側の道を進むと、墓地や稲荷神社の脇を通って轟木に至る道となっている。

2. 殿様や伊能忠敬も高屋敷を通過

北浜街道は **巡検使街道**とも呼ばれ、幕府が藩を検分するために派遣する巡検使の通り道でもあった。そのような村々では道路を普請などして巡検使を迎えた。下市川村は常宿で、江戸時代には7回の通行記録があり、人馬・従者を含めて100名もの一行が奥入瀬川を渡った。

盛岡藩の殿様の通行も3回記録されている。元文4年（1739）には、**盛岡藩第7代藩主利視公**が下風呂温泉湯治の帰りに百石から船で高屋敷に渡っている。川渡しには、**御給人**を川の両側に置いて、船着場より川下百間程の間に水練の達者な者を4.5人ずつ配置したという。巡検使の通行でさえ驚かされるのに、駕籠・人馬・従者等の大名行列の大層なこと、↗

↘それを迎える村人は、道路普請や渡し場の整備・休憩所を設けるど、苦労は並大抵のことではなかった。

享和元年（1801）10月12日、公儀の御用測量家の**伊能忠敬**も高屋敷を通って百石に渡っている。村には、「羽織袴で丁重に送り迎えすること、川渡しには**肝入**や**老名**（一族の長）が出て世話をすること」など、お触れが回った。翌日、浜三沢で猛吹雪にあったことが記されている。

← **庚申塔を兼ねた「追分石」**
文政13年（1830）の銘あり。

3. 奥入瀬川の川渡し

奥入瀬川は、正保の国絵図（1645年頃）には、「奥入瀬川　歩行渡し　広さ17間（約30m）、深さ2尺5寸（約75㎝）、山川ゆえ、少しの雨にも大水が出、渡し不自由」とある。元禄の国絵図（1700年頃）にも歩行渡とあり、この頃は漕いで渡ったものと思われる。江戸後期には小舟も使われたようであるが、天保6年（1835年）に渡し船が相坂（現・十和田市）で建造され、本格的な「船渡し」が始まった。渡し場は現在の幸運橋より1㎞ほど下流で、当時はウノキとよばれる大木と、傍らに卯之木大明神社（現・稲荷神社の前身）があった辺りである。対岸の藤ヶ森には、渡し守の家や2軒の茶屋があった。

4. 幸運橋架橋と賑わい

奥入瀬川に初めて木造の「幸運橋」が架けられたのは明治19年である。この架橋によって、それまでの交通の障害が解消され、人的・物的移動や交流が飛躍的に増大していった。百石は物流の拠点として賑わって町並みを形成し、高屋敷の人々も百石との結びつきを深めていった。「幸運橋」から続く河原の道（現在の橋の下）の両側には30戸程の家々が軒を連ねたが、戦後の河川改修や現コンクリート橋への架け替え（昭和28年完成）などで移転を余儀なくされた。（了）

参考資料：「百石町誌」「五戸町誌」「北浜街道」「流れる五戸川」